

『豊橋百科事典』にまつわる愛知大学

社会人 大伊和雄



事典の編纂において、編者は森羅万象、東西古今の事象を万遍なく表象しようと心がけることであろう。しかし、瞬時にはそれは冀^{きぼう}求すべき理想の極でしかない、ということに覚醒することによって、悲嘆のどん底へ突き落とされる。編集方針、予算、人材、基本的資料、出版社の選定などの制約を受けざるを得ないから、遺漏なきように事業を終えるのは並大抵の業ではない。そもそも地方自治体の一都市、豊橋市が『豊橋百科事典』を編もうとした意図は何故であったのか。市制百年を記念して、他の発散的イベントとは別に、形あるものとしてある程度の知の遺産を後年へ継承していこう、という発想があったのであろう。目的、意義については「序」、「あとがき」を参照していただくこととして、ここでは愛知大学との関連事項についてが所与のテーマである。

まず、あ項の「愛知大学」～「愛知大学前駅」の4項目の表出からみてみよう。「愛知大学」は1946年11月旧制大学令により設立が認可されたとある。この旧制大学令というところがポイントであって、史的な観点をよくふまえている。この事実は本学関係者も豊橋市民も、よく噛みしめてみる必要があるのではなかろうか。豊橋図書館の「簡齋文庫」「霞山文庫」の紹介や中国関連文献の充実ぶりも紹介されている。「愛知大学事件」は1952年5月7日発生した公安事件で、東大ポポロ演劇事件、早大事件とともに三大公安事件と通称され、大学の自治と警察権について司法判断が求められた。実に結審迄21年を要した歴史的裁判であった。1962年12月

25日発生した「愛知大学生遭難事故」は山岳部員13名が薬師岳東稜で遭難死した悲惨な事故であった。

このあたりで検索を放擲^{ほうてき}してしまつては実に残念である。人物（物故者限定）の項で記載されている方々の中で、愛知大学の高名・著名教職員が採択されている。例えば、林毅陸（1872～1950）初代学長、本間喜一（1891～1987）2代・4代学長、小岩井浄（1897～1959）3代学長らの略歴や本学における功績も簡明に記載されていて要領を得ている。さらに四季派の代表的詩人で、長く本学で近代詩を講じた丸山薫（1899～1974）は、「丸山薫賞」とともに併記されている。

文献の項から緋^ひげば、『中日大辞典』をはじめ『古今和歌集への道』（久曾神昇）、『三河地方知識人史料』（田崎哲郎）など、本学の研鑽の成果である各種基礎文献の内容が、市民方々に明確に伝播されるように配慮されている。さらに、研究所、センターは勿論のこと、建築物、旧軍事関連事項にまでおよんでいることから、愛知大学に関する事項は、案外奥の深い選択がなされていて、知的興味がかきたてられる次第である。

ヘーゲルが『歴史哲学（上）』（岩波文庫、1994、15頁）で「回想録の作者は高い地位についていなければならない。上にたつてはじめて、ものごとを公平に万遍なく見わたせるので、下の小さい窓から見あげていては、事実の全体はとらえられない。」と述懐しているが、ここで回想録の作者を「事典の編集者」に置換してみれば、けだし正鵠^{せいこく}を得ていて妙である。